

日蓮大聖人御書全集

あきもとごしょ

秋元御書

新版

1457

ς

1467

あきもと さしょ

# 秋元御書

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

あきもと たろう

弘安 3年

1月 27日

59歳

秋元太郎

つつご き いちぐつ

さんじゅう

さかずきつ

ろくじゅう

送り給び候い畢わんぬ。

御器と申すは、うつわものと読み候。

大地くぼければ水たまる。青天淨ければ月澄めり。月出で

ぬれば水淨し。雨降れば草木昌えたり。器は大地のくぼき

がごとし。水たまるは池に水の入るがごとし。月の影を浮か

ぶるは法華経の我らが身に入らせ給うがごとし。

ほけきょう

われ

み

たも



じと左右の手を二つの耳に覆い、あるいは口に唱えじと吐き出だしぬ。譬えば、器を覆するがごとし。

あるいは少し信ずるようなれども、また惡縁に值つて信心うすくなり、あるいは打ち捨て、あるいは信ずる日はあれども捨つる月もあり。これは水の漏るるがごとし。

あるいは法華經を行づる人の、一口は南無妙法蓮華經、

一口は南無阿彌陀仏なんど申すは、飯に糞を雜え、沙・石を入れたるがごとし。法華經の文に「ただ樂つて大乗經典を

受持するのみにして、乃至、余經の一偈をも受けざれ」等

と説くはこれなり。世間の学匠は法華経に余行を雜えても  
苦しからずと思えり。日蓮もさこそ思い候えども、経文は  
しからず。譬えば、后の大王の種子を妊めるが、また民と  
とつげば、王種と民種と雜じつて天の加護と氏神の守護と  
に捨てられ、その國破るる縁となる。父一人出で来れば、王  
にもあらず、民にもあらず、人非人なり。

法華経の大事と申すはこれなり。種・熟・脱の法門、  
法華経の肝心なり。三世十方の仏は、必ず妙法蓮華経の  
五字を種として仏に成り給えり。南無阿弥陀仏は仏種には

あらず。真言・五戒等も種ならず。能く能くこのことを習いたま  
給うべし。これは雑なり。

この覆・漏・汚・雜の四つの失を離れて 候 器をば完器  
と申して、まつたき器なり。塹つつみ漏らざれば、水失す  
まつた

と申して、まつたき器なり。塹つつみ漏らざれば、水失す  
まつた  
ることなし。信心のこころ全ければ、平等大慧の智水乾く  
ことなし。

今この筒の御器は、固く厚く候上、漆淨く候えば、  
法華経の御信力の堅固なることを顕し給うか。

毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて、四天下第一の福天

い たも じょうとくぶにん うんらいおんのうぶつ はちまんしせん はち  
と云われ給う。淨德夫人は雲雷音王仏に八万四千の鉢を  
くよう まい みようおんぼさつ な たも いま ほけきょう つつごき  
供養し進らせて、妙音菩薩と成り給う。今、法華経に筒御器  
さんじゅう さかずきろくじゅうまい ほとけ な たま  
三十・蓋六十進らせて、いかでか仏に成らせ給わざる  
べき。

にほんこく もう じゅう な ふそう やまと  
そもそも、日本国と申すは十の名あり。扶桑・野馬台・  
みずほ あきつしまとう べつ ろくじゅうろくかこく しまふた なが  
水穂・秋津洲等なり。別しては六十六箇国・島二つ。長さ  
さんぜんより ひろ ふじょう ひやくり

三千余里。広さは不定なり、あるいは百里、あるいは五百里  
とう ごきしちどう こおり ごひやくはちじゅうろく ごう さんぜんしちひやくにじゅうく た  
等。五畿七道、郡は五百八十六、郷は三千七百一十九、田  
しる じょうでんいちまんいつせんいつぴやくにじつちよう ないしづちじゅうはちまんごせんごひやく  
の代は上田一万一千一百二十町、乃至八十八万五千五百

ろくじゅうしちょう にんずう しじゅうくおくはちまんくせんろっぴやくごじゅうはちにん  
六十七町。人数は四十九億八万九千六百五十八人なり。  
じんじや さんせんいつぴやくさんじゅうにしや てら いちまんいつせんさんじゅうしちしょ なん  
神社は三千一百三十二社、寺は一万一千三十七所、男は  
じゅうくくまん せんはっぴやくにじゅうはちにん にょ にじゅうくくまん せん  
十九億九万四千八百一十八人、女は二十九億九万四千  
はっぴやくさんじゅうにん なん なか にちれん だいいち もの  
八百三十人なり。その男の中に、ただ日蓮、第一の者な  
なにごと だいいち  
り。何事の第一とならば、男女に悪まれたる第一の者なり。  
にほんこく くにおお ひとおお  
その故は、日本国に国多く人多しといえども、その心  
いちどう なむ あみだぶつ くち 遊  
一同に南無阿弥陀仏を口ずさみとす。阿弥陀仏を本尊とし、  
あみだぶつ ほんぞん  
九方を嫌つて西方を願う。たとい法華経を行づる人も、  
くほう きら さいほう ねが  
真言を行う人も、戒を持つ者も、智者も、愚人も、余行を  
しんごん おこな ひと かい たも もの ちしゃ ぐにん よぎょう

傍として念佛を正とし、罪を消さん 謀は名号なり。故に、あるいは六万・八万・四十八万返、あるいは十返・百返・千返なり。

しかるを、日蓮一人「阿弥陀仏は無間の業、禪宗は天魔の所為、真言は亡國の悪法、律宗・持齋等は國賊なり」と申す故に、上一人より下万民に至るまで、父母の敵、宿世の敵、謀叛・夜討ち・強盜よりも、あるいは畏れ、あるいは瞋り、あるいは詈り、あるいは打つ。これを訾る者には所領を与え、これを讚むる者をばその内を出だし、あるいは所領を与え、これを讚むる者をばその内を出だし、あるいは

かりよう

ひ

せつがい

もの

ほうび

うえ

は過料を引かせ、殺害したる者をば褒美などせらるる上、

りょうど

ごかんき

こうむ

両度まで御勘気を蒙れり。

とうせいだいいち ふしぎ もの

当世第一の不思議の者たるのみならず、人王九十九代、仏法

わた

しちひやくよねん

ふしぎ

もの

渡つては七百余年なれども、かかる不思議の者なし。

にちれん ぶんえい だいすいせい

日蓮は文永の大彗星のごとし、日本国に

にほんこく

むかし

な

てんぺん

ちよう

昔より無き天変

なり。

なり。

にほんこく

よはじ

むほん

ものにじゅうろくにん

だいいち

日本国に代始まつてよりすでに謀叛の者二十六人。第一

おおやまのみこ

だんに

おおいしのやままる

ないし

だいにじゅうごにん

よりも

は大山王子、第二は大石山丸、乃至、第二十五人は頼朝、

だいにじゅうろくにん よしどき

にじゅうしにん ちょう せ

たてまつ

第二十六人は義時なり。二十四人は朝に責められ奉り、

獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝す。一人は王位を傾け

たてまつ こくちゅう て にぎ おうぼうすで つ ひとびと

奉り、國中を手に拳る。王法既に尽きぬ。これらの人々

も、日蓮が万人に惡まるるには過ぎず。

よし たず ほけきよう もつと だいいち もん

その由を尋ねれば、法華経には「最も第一なり」の文あ

こうぼうだいし ほつけ もつと だいさん じかくだいし じかく いま

り。しかるを、弘法大師は「法華は最も第二なり」、慈覺大師

ほつけ もつと だいに だいに だいさん ほけきよう む ほつけ もつと

は「法華は最も第二なり」、智証大師は慈覺のごとし。今、

えいざん とうじ おんじょうじ しょそう ほけきよう いま

叡山・東寺・園城寺の諸僧、法華経に向かつては「法華は最

よ だいに だいに だいさん よ

も第一なり」と読めども、その義をば「第一」「第三」と読む

だいいち

く げ ぶ け し さ い し ご き え  
なり。公家と武家とは子細は知らしめさねども、御帰依の  
こうそうとうみな  
高僧等皆この義なれば、師檀一同の義なり。その外、禪宗  
きょうげ べつでん うんぬん ほけきょう べつじょ ことば ほか ぜんしゅう  
は「教外に別伝す」云々。法華経を蔑如する言なり。念佛宗  
せん なか ひと な  
は「千の中に一りも無し」「いまだ一人も得る者有らず」  
もう こころ ほけきょう ねんぶつ たい いちにん う もの あ  
と申す。心は法華経を念佛に對して挙げて失う義なり。  
りつしゅう しようじょう しようほう とき ほとけゆる たも  
律宗は小乗なり。正法の時すら仏免し給うことなし。  
まつぽう ぎょう こくしゅ おうわく たてまつ  
いわんや、末法にこれを行じて国主を誑惑し奉るをや。  
だつき ばつき ほうじ さんによ さんおう たぶら  
姐己・妹喜・褒姒の三女が三王を誑かして代を失いしが  
あくほうくに る ふ ほけきょう うしな ゆえ  
ごとし。かかる惡法國に流布して法華経を失う故に、

あんとく たかひらとう だいおう てんしょうだいじん しようと はなまん す たま  
安徳・尊成等の大王、天照太神・正八幡に捨てられ給い  
しょじゅうとう かたむ たま たま そうでん  
所従等に傾けられ給いしは、天に捨てられさせ給う故ぞ  
かし。

ほけきょう おんかたき ご き え あ  
法華経の御敵を御帰依有りしかども、これを知る人なけ  
とが し  
れば、その失を知ることもなし。「智人は起を知り、蛇は自  
ら蛇を識る」とは、これなり。

にちれん ちじん  
じや りゆう こころ し  
日蓮は智人にあらざれども、蛇は竜の心を知り、鳥の  
よ きつきょう はか  
世の吉凶を計るがごとし。このことばかりを勘え得て  
かんが え

そういう

もう

しゅゆ

とが  
あ

候なり。このことを申すならば、須臾に失に当たるべし。

もう

申さずんば、また大阿鼻地獄に墮つべし。

ほけきょう

なら

みつ

いち

き

ぼうにん

しょういびく

法華経を習うには三つの義あり。

一には謗人。

勝意比丘。

だいあびじごく

お

苦岸比丘・無垢論師・大慢婆羅門等がごとし。

彼らは三衣を

かれ

さんね

もう

身に纏い、一鉢を眼に当て、

二百五十戒を堅く持つて、し

にひやくごじつかい

かた

たも

かも大乗の讐敵と成つて無間大城に墮ちにき。

今日本の日本

こく

いま

にほん

國の弘法・慈覺・智証等は、持戒は彼らがごとく、智慧は

ちえ

だいにちきょうしんごんたいいち

か

こと

また彼の比丘に異ならず。

ただし、「大日経真言第一、

ほけきょうだいに

だいさん

もう

法華経第一・第三」と申すこと、

百千に一つも日蓮が申す

ひやくせん

ひと

もう

ほけきょうだいに

むけんだいじょう

ようならば、無間大城にやおわすらん。このことは申すも

おそ

恐れあり。まして書き付くるまではいかんと思ひ候えども、

ほけきょう もつと だいいち

だいいち そうるう

と に

「法華経は最も第一なり」と説かれて候に、これを「二」

さん とう よ

ひと ひと

ひと ひと

ひと

ひと

ひと

ひと

ひと

「三」等と読まん人を聞いて、人を恐れ國を恐れて申さず

すなわ よし

かれ あだ

もう

いっさいしゅじょう

だいおんてき

んば、「即ちこれ彼が怨なり」と申して、一切衆生の大怨敵

ひと おそ

よし きょう

しゃく 載

そうちら

もう

そうちら

なるべき由、経と釈とにのせられて候えば、申し候な

ひと おそ

よ はばか

い

われ

しんみよう

あい

り。人を恐れず、代を憚らず云うこと、「我は身命を愛せ

ひと おそ

もう

ず、ただ無上道を惜しむのみ」と申すはこれなり。

ふきょうばさつ あつく じょうしゃく

おそ

たじ

たじ

もう

せけん

おそ

不輕菩薩の悪口・杖石も他事にあらず。世間を恐れざ

るにあらず。ただ法華経の責めの苦ろなればなり。例せば、  
祐成・時致が大将殿の陣の内を簡ばざりしは、敵の恋し  
く恥の悲しかりし故ぞかし。これは謗人なり。

謗家と申すは、すべて一期の間法華経を謗ぜず昼夜  
十二時に行ざれども、謗家に生まれぬれば必ず無間地獄  
に墮つ。例せば、勝意比丘・苦岸比丘の家に生まれて、あ  
るいは弟子と成り、あるいは檀那と成りし者どもが、心な  
らず無間地獄に墮ちたる、これなり。

譬えば、義盛が方の者、軍をせし者はさて置きぬ、腹の



いっさい わざわ あつ

# 一切の禍い集まる。

譬えば、山に草木の滋きがごとし。三災月々に重なり、  
七難日々に来る。飢渴発れば、その国餓鬼道と変じ、疫病  
重なれば、その国地獄道となる。軍起これば、その国修羅  
道と変ず。父母・兄弟・姉妹をば簡ばず妻とし夫と憑め  
ば、その国畜生道となる。死して三悪道に堕つるにはあら  
ず、現身にその国四惡道と変ずるなり。これを謗国と申す。  
例せば、大莊嚴仏の末法、師子音王仏の濁世の人々のご  
とし。また報恩経に説かれて候がごとくんば、過去せる

父母・兄弟・姉妹・一切の人の死せるを食し、また生きた  
るを食す。今、日本國またまたかくのごとし。真言師・  
禪宗・持齋等の、人を食する者、國中に充満せり。これ  
ひとえに真言の邪法より事起これり。竜象房が人を食らい  
しは万が一つ顕れたるなり。彼に習つて人の肉を、あるいは  
は猪鹿に交え、あるいは魚鳥に切り雜え、あるいはたたき  
加え、あるいはすしとして売る。食する者数を知らず。皆、  
天に捨てられ、守護の善神に放されたるが故なり。結句は、  
この国他国より責められ、自国どし打ちして、この国変じ

むけんじごく な

て無間地獄と成るべし。

にちれん

おお

とが

か

み ゆえ よどうざい とが のが

日蓮、この大いなる失を兼ねて見し故に、与同罪の失を脱  
れんがため、仏の呵責を思うが故に、知恩・報恩のため、  
くに おん ほう ほとけ おも かしゃく おも ゆえ ちおん ほうおん  
国の恩を報ぜんと思つて、国主ならびに一切衆生に告げ知  
らしめしなり。

ふせつしょうかい もう いっさい しょかい なか だいいち

不殺生戒と申すは一切の諸戒の中の第一なり。五戒の初

ふせつしょうかい はっかい じっかい にひやくごじっかい ごひやっかい ぼんもう  
めにも不殺生戒、八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網の

じゅうじゅうごんかい

けごん

じゅうむじんかい

ようらくきょう

じっかいとう

はじ

十重禁戒・華嚴の十無尽戒・瓔珞経の十戒等の初めには  
みな ふせつしょうかい じゅか さんぜん いまし なか たいへき  
皆、不殺生戒なり。儒家の三千の禁めの中にも大辟こそ

だいいち

そういう

ゆえ

さんせんかい へんまん

しんみょう あたい

第一にて候え。その故は「三千界に遍満するも、身命に直

するもの有ることなし」と申して、三千世界に満つる珍宝な

もう さんせんせかい み ちんぽう

あ

れども、命に替わることはなし。蟻子を殺す者なお地獄に

いのち か ありのこ ころ もの じごく

堕つ。いわんや魚鳥等をや。青草を切る者なお地獄に堕つ。

ぎよちようとう

あおくさ

き

もの

じごく

お

堕つ。いわんや魚鳥等をや。青草を切る者なお地獄に堕つ。

しがい き もの

いわんや死骸を切る者をや。かくのどとき重戒なれども、

ほけきよう かたき な

だいいち

くどく

と

たも

法華経の敵に成れば、これを害するは第一の功德と説き給うなり。いわんや、供養を展ぶべけんや。

ゆえ

せんよこくおう ごひやくにん ほつし ころ

かくとくびく

むりよう

故に、仙予国王は五百人の法師を殺し、覺徳比丘は無量の

ほうぼう もの

ころ

あいくだいおう

じゅうまんはっせん

げどう

ころ

たま

謗法の者を殺し、阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき。

こくおう

びくとう

えんぶだいいち

けんおう

じかいだいいち

これらの国王・比丘等は、閻浮第一の賢王、持戒第一の

智者なり。仙予国王は釈迦仏、覚徳比丘は迦葉仏、阿育大王

とくどう

じん

いま

にほんこく

は得道の仁なり。今、日本国もまたかくのごとし。持戒・

破戒・無戒、王臣・万民を論ぜず、一同の法華経誹謗の国な

り。たとい身の皮をはぎて法華経を書き奉り、肉を積ん

で供養し給うとも、必ず国も滅び、身も地獄に墮ち給うべ

き大いなる科あり。ただ真言宗・念佛宗・禅宗・持齋等

の身を禁めて法華経によせよ。

てんたい ろくじっかん そら う み いまし ほけきょう 寄

天台の六十巻を空に浮かべて国主等には智人と思われた

ちじん

おも

こうしゅとう

ちじん

おも

る人々の、あるいは智の及ばざるか、あるいは知れども世を  
恐るるかの故に、あるいは真言宗をほめ、あるいは念佛・  
禪・律等に同ずれば、彼らが大科には百千超えて候。例  
せば、成良・義村等がごとし。慈恩大師は玄贊十巻を造つ  
て、法華経を讃めて地獄に墮つ。この人は太宗皇帝の御師、  
玄奘三蔵の上足、十一面觀音の後身と申すぞかし。音は  
法華経に似たれども、心は爾前の経に同ずる故なり。嘉祥  
大師は法華玄十巻を造つて、既に無間地獄に墮つべかりし  
が、法華経を読むことを打ち捨てて天台大師に仕えしかば、

じごく く のが たま

地獄の苦を脱れ給いき。

いま ほつけしゅう ひとびと

ひえいざん ほけきょう

今、法華宗の人々もまたかくのごとし。比叡山は法華経の

ごじゅうしょ にほんこく いちじょう ごしょりょう

じかくだいし さんぜん

御住所、日本国は一乗の御所領なり。しかるを、慈覚大師

ほけきょう ざす うば と

しじん ざす

は法華経の座主を奪い取つて真言の座主となし、三千の

だいしゅ

しょじゅう な

こうぼうだいし ほつけしゅう

だんな

大衆もまたその所従と成りぬ。弘法大師は法華宗の檀那に

おわ さ が てんのう うば と

だいり しじんしゅう てら

て御坐します嵯峨天皇を奪い取つて、内裏を真言宗の寺と

な あんとくてんのう みょううんざす し

よりとものあそん じょうぶく

成せり。安徳天皇は明雲座主を師として頼朝朝臣を調伏

たま うだいしょうどの ばつ

せさせ給いしほどに、右大将殿に罰せらるるのみならず、

あんとく さいかい しず みょううん よしなか

たま

たかひらおう

安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺され給いき。尊成王は、

てんだい ざす じえんそうじょう とうじ おむろ しじゅういちん こうそう

天台座主の慈円僧正、東寺、御室ならびに四十一人の高僧

とう しょうげ たてまつ だいり だいだん た よしひときうきょうのごんのだいぶどの

等を請下し 奉り、内裏に大壇を立てて義時右京権大夫殿

じょうぶく

しちにち もう ろくがつじゅうよつか らくようやぶ

を調伏せしほどに、七日と申せし六月十四日に洛陽破れて、

おう おきのくに さどがしま うつ ざす おむろ

王は隱岐国あるいは佐渡島に遷され、座主・御室は、ある

せ

おも じ し たま

せけん ひとびと

いは責められ、あるいは思ひ死に死に給いき。世間の人々、

こんげん し

ほけきよう

だいにちきょう

この根源を知ることなし。これひとえに法華経・大日経の

しょうれつ まよ ゆえ

勝劣に迷える故なり。

いま

にほんこく

だいもうここく

せ

え

か

ふきつ

ほう

今もまた、日本国、大蒙古国の責めを得て、彼の不吉の法

ごじょうぶく

おこな

うけたまわ

につきふんみよう

をもつて御調伏を行わると 承る。また日記分明なり。

このことを知らん人、いかでか歎かざるべき。

かな

われ

ひぼうしようほう

くにう

だいく

あ

悲しいかな、

我ら誹謗正法の國に生まれて大苦に值わん

ぼうしん

のが

ぼうけ

ぼうこく

とが

かんぎよう

よう

ことよ。たとい謗身は脱るといふとも、

ぼうけ

とが

のが

おも

ふぼ

きようだいとう

きようだいとう

う

かんせん。謗家の失を脱れんと思わば、

ぼうけ

とが

のが

おも

ふぼ

きようだいとう

きようだいとう

う

のことを語り申せ。あるいは悪まるるか、あるいは信ぜさせまいらするか。謗國の失を脱れんと思わば、

のが

おも

にく

おこな

しん

し奉つて、死罪か流罪かに行わるべきなり。「我は身命

のが

おも

こくしゅ

かんぎよう

われ

しんみよう

を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」と説かれ、「身は軽く

のが

おも

お

と

み

かる

法は重し。身を死して法を弘む」と釈せられしは、これな

ほう

おも

み

こころ

ほう

ひる

しゃく

り。

過去遠々劫より今に仏に成らざりることは、かようのこと  
に恐れて云い出ださざりける故なり。未来もまたまた  
かくのことくなるべし。今、日蓮が身に当たつてつみ知ら  
れて候。たといこのことを知る弟子等の中にも、当世の責  
めのおそろしさと申し、露の身の消え難きによつて、ある  
いは落ち、あるいは心ばかりは信じ、あるいははとこうす。  
御経の文に「難信難解」と説かれて候が、身に当たつて  
貴く覚え候ぞ。謗する人は大地微塵のごとし。信する人

そうじょう ど ぼう ひと たいかい すす ひと いつたい。  
は爪上の土のごとし。謗する人は大海、進む人は一滯。  
てんだいさん りゅうもん もう ところ はる はじ  
天台山に竜門と申す所あり。その滝百丈なり。春の始  
うおあつ な たき たき ひやくせん ひと のぼ うお  
めに魚集まつてこの滝へ登るに、百千に一つも登る魚は  
りゅう な たき はや ひやくせん ひと のぼ うお  
竜と成る。この滝の早きこと、矢にも過ぎ、電光にも過ぎ  
のぼ うえ はる はじ や す でんこう  
たり。登りがたき上に、春の始めにこの滝に漁父集まつて魚  
のぼ うえ はる はじ や す でんこう  
を取る。網を懸くること百千重、あるいは射て取り、あ  
と あみ か ひやくせんじゅう  
るいは酌んで取る。鷦・鷯・鷗・鳩・虎・狼・犬・狐  
あつ ちゅうや と く じゅうねんじゅうねん ひと りゅう  
集まつて昼夜に取り噉らうなり。十年二十年に一つも竜  
うお  
となる魚なし。

れば、凡下の者の昇殿を望み、下女が后と成らんと  
するがごとし。法華経を信ずること、これにも過ぎて候と  
思しめせ。

常に仏禁めて言わく、いかなる持戒、智慧高く御坐し  
まして一切経ならびに法華経を進退せる人なりとも、  
法華経の敵を見て、責め罵り国主にも申さず、人を恐れて  
黙止するならば、必ず無間大城に墮つべし。譬えば、我は  
謀叛を発さねども、謀叛の者を知つて国主にも申さねば、与  
同罪は彼の謀叛の者のごとし。南岳大師云わく「法華経の讐

見て呵責せざる者は謗法の者なり。無間地獄の上に墮ちん」と。見て申さぬ大智者は、無間の底に墮ちて、彼の地獄の有らん限りは出すべからず。

日蓮、この禁めを恐るる故に國中を責めて候ほどに、一度ならず流罪・死罪に及びぬ。今は罪も消え、過も脱れなんと思つて、鎌倉を去つてこの山に入つて七年なり。

この山の為体、日本國の中には七道あり。七道の内に東海道十五箇国、その内に甲州の飯野御牧の三箇郷の内、波木井と申すこの郷の内、戌亥の方に入つて二十余里の深

山さんあり。北きたは身延山みのぶさん、南みなみは鷹取山ひがし、西にしは七面山しちめんざん、東ひがしは天子山てんしそんなり。板かわを四枚いたつい立てたるがごとし。この外そとを回めぐつて四つよつの河かわあり。北よりきた南みなみへ富士河ふじかわ、西よりにし東ひがしへ早河はやかわ、これは後うしろなり。前に西よりまえ東ひがしへ波木井河はきいがわの中になか一つひとの滝たきあり。身延河みのぶがわと名づけたり。中天竺ちゆうてんじくの鷲峰山じゆぶせんをこの処ところへ移せるか、はたまた漢土かんどの天台山てんだいさんの来れるかと覺ゆ。

か、はたまた漢土かんどの天台山てんだいさんの来れるかと覺ゆ。

この四山四河しがんしがの中に手なかの広さ程ひろほどの平らかなる処たいあり。ここに庵室あんじちを結んで天雨てんうを脱むすれ、木の皮の皮をはぎて四壁よへきとし、自死じしの鹿しかの皮かわを衣ころもとし、春は蕨はるをわらびわらびおみみやしなやしなあきあき自死じしの鹿しかの皮かわを衣ころもとし、春は蕨はるを折こつて身みを養やい、秋は

このみ ひろ いのち ささ そら  
果を拾つて命を支え候いつるほどに、去年十一月より  
雪降り積んで、改まる年の正月、今に絶ゆることなし。  
庵室は七尺、雪は一丈、四壁は氷を壁とし、軒のつらら  
は道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本  
より人も来らぬ上、雪深くして道塞がり、問う人もなき処  
なれば、現在に八寒地獄の業を身につぐのえり。生きなが  
ら仏には成らずして、また寒苦鳥と申す鳥にも相似たり。  
頭は剃ることなれば、うずらのごとし。衣は氷にとじ  
られて、鴛鴦の羽を氷の結べるがごとし。

ところ

いにしえむつ

ひと

と

で し と う

す

かかる処へは、古昵びし人も問わず、弟子等にも捨て

そうちら

られて候いつるに、この御器を給わつて、雪を盛つて飯と

かん

みず の

濃

漿

おも

こころざし

観じ、水を飲んでこんずと思う。志のゆくところ、思い

や

たま

もう

そうちらう

きようきようきんげん

遣らせ給え。またまた申すべく候。恐々謹言。

こうあんさんねんしおうがつにじゅうしちにち

日蓮

花押

にちれん

かおう

弘安三年正月一十七日

あきもとたろうひょうえどのごへんじ  
秋元太郎兵衛殿御返事